

「キャリア教育」への挑戦

ー基盤教育教養科目「キャリアデザインⅠ、Ⅱ」の取り組み（事例報告）ー

松坂暢浩

（小白川キャンパスキャリアサポートセンター）

はじめに

私は、平成 23 年度より山形大学に赴任し、平成 24 年度より教鞭をとるようになった。それまでは、民間企業で4年ほど大学生向け就職支援の業務に従事し、その後1年ほど、フリーランスでキャリア教育および就職支援のコンサルティングの仕事をしてきた。その際に、他大学でキャリア教育科目の非常勤講師をしていた経験を活かし、本学においてキャリア教育科目「キャリアデザインⅠ、Ⅱ」の授業を基盤教育にて前後期担当している。本稿では、名誉ある平成 25 年度のベストティーチャー賞をいただき、賞の対象となった当該授業において挑戦してきた内容を報告するものである。

1. 「キャリアデザインⅠ、Ⅱ」について

本授業は、学生一人ひとりの社会的自立を促すことを目指したキャリア教育科目である。

本授業の目的とねらいとしては、本学が掲げる人生を強く豊かに生きていくための「人間力」を高めることに主眼を置いたものである。そして最終学年次（大学4年、修士2年生）に納得した意思決定（進路決定）ができるために必要な視点を早期から提供することである。

本授業の「キャリア」の意味としては、D.E. スーパーの定義「キャリアとは生涯において個人が果たす一連の役割、およびその役割の組み合わせである」[Super, 1980]を基本としている。「キャリア教育」については中央教育審議会答申の定義「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」[中央教育審議会, 2012]に基づくものである。そのため、就職のための情報提供や対策が主眼では

なく、変化の激しい社会のなかで個々人が「いかに生きるか」、「いかに働くか」を考え、将来のために大学で「いかに学ぶのか」を考えることも重要な点となる。この問いかけを通して、自ずとキャリアを見据えた学生生活ができ、日々の意欲にもつながるものと考ええる。

本授業のコンセプトとして、前期に実施した「キャリアデザインⅠ」で自己理解を全体のメインテーマとした。自己理解の基本は価値・動機・能力などであるが、これらを扱う概念としてE.H. シャインの「内的キャリア」[Schein, 1978]を重視している。これは働きがい、やりがいに関係するものである。後期に実施した「キャリアデザインⅡ」は社会理解を全体のメインテーマとした。こちらは「外的キャリア」を重視している。これは所属する組織や職業名に関係するものである。社会理解の中身としては、実社会で生き抜くために必要な最低限持っていて欲しい知識（経済、金融、法律、税金など）の習得と、それらの情報を収集するための方法（ネットでの収集方法や新聞などの読み方）を学ぶ内容とした。また企業に興味を持ってもらうために企業研究のワークも合わせて行った。

本授業スタイルとしては、学生が自分で考えて行くことに重点を置いた授業を目指した。知識や情報の提供は必要最小限とし、学生が素直に感じ、気づいた事をまとめ、学生同士で分かち合う（共有）ことに重点を置き、ペア・グループワークの時間を多く授業内に設けている。これ以外にも、3週間かけてグループに1つのテーマを与えて課題に取り組んでももらう取り組みも行った。このようなスタイルは、キャリアカウンセリングの要素があるため、教員を始め 15 回の授業に関わる講師はキャリアカウ

ンセラーの有資格者、あるいはそれに類するトレーニングを受けた人達で構成されている。今後はこの条件にこだわることなく、広く様々な教員で授業ができるようにする予定である。また内容が偏らないように、学内でキャリア教育に取り組まれている教員の協力を得ながら、1回ごとに講義内容や学生の反応について振り返る機会を設け、状況に合わせながら試行錯誤し、授業の内容の改善に取り組んでいる。

本授業の履修状況であるが、1年目の平成24年度は前後期321名の履修であった。2年目の25年度は前後期704名と約2倍の履修となった。学生が履修しやすいように同じ内容で週に2回開講していた。しかし多い時は1授業あたり300名を超えたこともあり、大人数でも授業スタイルをいかに維持するかが課題となった。そのための取り組み内容については、次項で述べたいと思う。

2. 大人数での取り組める授業を目指しての挑戦

本授業のスタイルは、あくまでも学生が中心となり、主体的に授業に取り組むための環境をいかに作るかが重要である。またコミュニケーションスキルの向上を図る上でも、仲の良い友人以外で、性別や学部の違う学生同士の交流の機会を提供したいと考えていた。

しかし、大人数をコントロールしながらいかに授業を行うか。また人数が増えると教室が大教室を使用しなければならず、稼働式ではない机や椅子のなかでグループワークをどのように行えばよいかなど課題が山積であった。

そこで本授業では、課題克服に向けて4つの取り組みに挑戦をした。1つ目はくじ引きによる座席決め、2つ目は授業進行をパターン化、3つ目は授業のルールを共有、4つ目は立ち会議形式でのグループワークである。以下4つの挑戦内容について詳細を紹介したい。

1) くじ引きによる座席決め

同じ学生同士で固まらないように、授業入室時に配布する資料に書かれた番号の座席に着席するように指示をした。これにより1つのグループ6人が、

毎回異なるメンバーになるようにランダム化できるようになった。その結果、知らない同士で着席するため、不要な雑談が減る効果もあった。これは当初想定していなかった効果であった。

2) 授業進行をパターン化

大人数でも、次に授業のなかで何を行うかが分かっているならば自主的に行動してくれるのではないかと仮説を立て、毎回の講義の流れを5つの場面にパターン化した。まず1つ目は「出会う」である。これは先述したくじ引きにより毎回新しいグループ作るというステップである。2つ目が「振り返る」である。これは教員より前回の授業内容の振り返りとフィードバックを受け、学生に思い出す作業をさせるものである。また前回の講義で学生からあった要望などについてもこの場で回答を行う。3つ目が「考える」である。この段階では、各回のテーマに沿って、個人ワークを行う。主にワークシートを配布し記入を行う時間とした。4つ目は「分かち合う」である。これはペア・グループワークにおいて個人ワークで書いた内容をお互いに発表し、共有を行う。またテーマについてのディスカッションを行うことで、新たな学びや気づきを得ることを目指している。そして最後の5つ目が「振り返る」である。本日の講義についてのまとめを行い、後日提出をしてもらう振り返りシートに本日の学びや気づきを記入してもらう時間とした。この5つのステップについて時間の目安を示し、次に何を行うかを意識しながら主体的に取り組める工夫を行った。

3) 授業のルールを共有

また、大人になる上で必要なマナーやルールを守る意識を高めるために、履修上守るべき10個のルール(①授業の最初と最後は挨拶から。②遅刻厳禁。③携帯操作厳禁。④飲食禁止。⑤脱帽、コートは脱ぐ。⑥ペア・グループワーク以外の私語厳禁。⑦ペア・グループワークでは積極的に発言する。⑧相手の立場に立って行動する。⑨人の話を聴く姿勢に注意する。⑩分からない事をそのままにしないで、必ずその場で質問し確認する。)を設定した。ただし、このルールは教員からの一方的な押しつけで行わなかった。まず学生に一度このルールについて意見を

求め、必要があれば学生と相談の上で修正を加えた。このやり取りは後述する「振り返りシート」を活用して行った。

4) 立ち会議形式でのグループワーク

グループワークの際は、6名1グループが、その場で席を立ち、お互いが向き合うように体を回転して行う(写真1)。この方法であると、可動式の教室でなくとも、階段教室などの大教室の固定式の椅子・机でもできる。さらに、ワークの際に立ち、終了後に座るといった動きをつけることでメリハリがつき、学生の私語も自然に静かになる。このスタイルは学生からも好評を得ている。

写真1. ①通常の授業風景



②グループワークの授業風景



3. 学生の成長を感じてもらう工夫

学生が自身の変化を実感してもらえるように、授業での学びや気づきを「振り返りシート」にまとめ、授業終了後3日以内にネットで提出させている。ネットへの入力、放送大学の「リアルタイム評価支援システム(REAS)」を用い、学生が、携帯やPC

で授業後に入力し提出をさせた。基本的には授業中に記入した「振り返りシート」の内容をそのまま入力することになるが、再サイトから提出することで授業全体を整理し、少し客観的な目で文章を追加することにより復習の効果を持たせている。「振り返りシート」の記入内容は、(1) 本日の講義を通して得た事、(2) 講義を通して得た事を明日からの生活の中でどのように生かしていきたいか、(3) 講義に対する意見の3種類である。特に字数制限していないが、1項目あたり100～200字程度の記入となっている。そして毎回提出される「振り返りシート」に目を通し、授業の理解度、進行上の反省点などを確認している。また授業のねらいが明確に絞られている場合は、特定の言葉がどの程度出現しているのかを抽出して分析している。例として「ほめる／ほめられる」をテーマとした回の分析例が表1である。これらの結果は、次回の授業の最初に行う「振り返る」のステップで、フィードバックを行っている。フィードバック内容としては、提出されたなかで、学生に共有したいコメントの紹介や、誤解を与えた内容の補足説明などを行っている。このような取り組みにより学生自身もこの授業での学びや気づきを再確認し、また同じ授業を受けた他の学生がどのようなことを学んだのかを確認でき、学生からも好評を得ている。

表1. みんなの感想で多かったもの (N=400名)

項目	人数	割合 (%)
褒められたり共感されると嬉しい	218	55
短所は長所でもある	130	33
自分の長所を他者から教えられた	123	31
自信がついた	71	18
他者を褒めるのは難しい	62	16
前向きになれた	37	9
他者から認められた	29	7

4. 受講学生の変化について

授業の最終回に独自で授業評価アンケートを実施し、履修学生の変化について確認を行った。「こ

れまでを振り返って、授業を受ける前と受けた後で変化はありましたか？※主観的な評価で結構です。」という質問に対して、アンケート回答学生(n=127)の95%が「変化があった」と回答していた。また、その変化についてのコメントを見ると、前期「キャリアデザインⅠ」では、自信を持って積極的に他者と関わろうとする前向きさがもてるようになった、他者の異なる価値観や意見を受け止める大切さを学んだといった変化に関するコメントがあった。このコメントからも自己理解が進んだものと考えられる。また後期「キャリアデザインⅡ」は、将来を考えるきっかけになった、社会に対する興味が湧き視野が広がったといった変化に関するコメントがあった。このコメントからも社会理解が進んだものと考えられる。

また、授業での学びや気づきを今後の大学生活でどのように活かしていきたいかについても、残りの学生生活で「いかに学ぶか」を自分の言葉で言える学生が多くなったことは、一定の成果であると考えている。

5. これからの課題について

最後に、今後のより良い授業を学生に提供する上での課題を挙げたい。

まず、授業で設定したねらいに対応したルーブリックの作成である。そして、それを元にした定量的な効果測定に取り組んでいきたいと考えている。

次に、本授業は必修科目でないが、今後より多くの学生に履修してもらえるように授業開講数を増やしていきたいと考えている。しかし、一部の教員しかできない授業ではなく、他の教員も同じようにできる仕組み作りが必要であろう。今後は授業のマニュアル作りも含めて取り組んでいきたいと考えている。

他にも改善が必要な点も多々あるが、まずは、1つずつ課題を解決し前に進めていくなかで、本学の学生にあった山形大学らしい「キャリア教育科目」の開発を目指していきたいと考えている。

参考文献

- Schein H. Edgar. (1978). 「Career Dynamics: matching individual and organizational needs」(二村 敏子・三善 勝代「キャリア・ダイナミクス——キャリアとは、生涯を通しての人間の生き方・表現である。」、白桃書房、)。
- Super E. D. (1980). 「A life-span, life-space approach to career development」. Journal of Vocational Behavior, 16, 282-298.
- 中央教育審議会. (2012). 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)。